君と見た夢

- 縷縷 -

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と見た夢

【Ｎコード】
Ｎ１８４０Ｚ

【作者名】
-縷縷-

【あらすじ】
大好きなスポーツと彼女
俺はどっちを追いかけるべきなんだろう。

君と見た夢

―――――――――――――

俺たちの夢は、もう
叶うことはないのだろうか。

……

叶わなくていいから・・・
叶わなくてもいいから・・・
本当に本当にまじで俺たちの夢叶わなくてもいいから・・・
叶えてもらわなくてもいいから
神様・・・
彼奴に言い忘れていた大事なことがあるんです。
お願いです。俺たちの夢叶わなくてもいいから
最後に１回だけ俺のお願いを聞いてください。
彼奴に会いたいんです。
どうしても会いたいんです。
お願いします。

１－（１）　お兄ちゃん

俺が８歳だったころ俺はいつも家の近くで一人で壁当てをしに行っていた。
しゅっっ、しゅぱっっ
「ふぅ…」
８歳だった俺は４０球でヘトヘトになっていて投げたボールをキャッチできずに
ポロッとこぼしてしまった。
「あぁ、きついなぁ。もう」
俺がそういいながらボールを追いかけているとボールが転がっている
方の道からヒョコッと出てきたお兄ちゃんがそのボールを拾ってくれた。

「ぁっ、おーいそこのお兄ちゃん！！」
手を大きく振り上げると兄ちゃんは金髪にツンツンたった髪をこっちに
向けた。
「コレ…お前の？！」
その兄ちゃんはボールを握りながら俺に向かって手を振る。
「そうだよぉ！！拾ってくれてありがとう。
すいませんが投げてこっちに投げてくれませんかぁ～？？」
お兄ちゃんは少し困った表情をして手に握ってあるボールをじっと見つめた。ボールから視線を外すとボールをこっちに向けてなげてきたっ。
「うわっっ！！！」
しゅぱっっどしんっ

俺は情けない事にしりもちをついてしまった。

「ごめんッ！！立てるか？」
お兄ちゃんはいつのまにか俺の前に立っていて手を差し伸べている。
「ぅ…うん！てかお兄ちゃんの球ものすごく速いね！！
俺のお父さんよりもっともっと速いよ！！今までこんな人見たことない！
お兄ちゃん野球やってるの？？」
俺が目を輝かせながらそう問うとお兄ちゃんはそれとは全く正反対の顔で
「あぁ…やって、たよ？今はやってねぇーんだ。」
と言った。俺はそれ以上何も聞けなかった。

「お前こそ野球やってんのか？つぅか何歳なんだよ一体。」
お兄ちゃんが一人でぶつぶつ言ってるから可笑しくて笑ってしまった。
「はは、野球は一人野球なんだ！この辺の子野球できる子いないから。
野球チームには8歳になってからってお母さんに言われているんだけど
もう8歳なんだ。でも野球チーム何処に行けばいいのか分かんなくて。」

1―(2)

俺が下を向いてそういうとお兄ちゃんは
「そっか。」とだけ言った。

「そうだ！！お兄ちゃんにお願いがあるんだけど。」
俺が目をキラキラ輝かせて言うとお兄ちゃんはとびっきりの笑顔で
「どうした??何??」と言った。

「野球チームが決まるまで俺に野球教えてほしいんだけど！！」
しばらくの沈黙…。沈黙を破ったのはお兄ちゃんだった。
「ん…分かった。いいよ」
「やったぁ！！ありがとう、たまに暇な時だけでいいから！！」
俺は跳ね上がりながら言った。
「じゃぁまた明日ね。」
たまにって言っておきながらちゃっかり明日来てねを遠まわしに言った俺。
俺はダッシュで家に帰った。この嬉しい知らせを誰かに聞いてほしくて。
「はぁはぁ。」ガチャッ
「ただいまぁあああっ。」
大きな声で言ったからお姉ちゃんがびっくりして部屋から出てきた。
「うるっさ。雄介(ゆうすけ)今日は遅かったんだね。」

「ん、そうなの！何か金髪のイケメンの中学生のすごいお兄ちゃんに会ってさ
明日から野球教えてもらえることになったんだ！！球何かすごく速くて
コントロールもよくてキャッチ出来なかったよぉ…。」

嬉しさのあまり興奮してお姉ちゃんの返事も聞かずにペラペラとしゃべり続けた。
するとお姉ちゃんは俺のバックから紙と鉛筆をとりだして何かを書き始めた。
ビリッッ
「あああああ！！！それ俺の大事な野球ノートなのにぃ。」
俺が泣くまねをしたけどそれもお姉ちゃんには通じず…。
「な…何描いてんの??」
残念ながらまたも無視。
「出来たっっ。こんな顔の人じゃなかった??」
お姉ちゃんは自信を持って何かを描いた紙を俺に向けてきた。
お姉ちゃんの下手くそな絵でも分かる。それは今日夕方あったお兄ちゃんの似顔絵だ。
「そ…そぉ。こんな感じだった。」
お姉ちゃんは、やっぱりという顔をした。
「陽輔(ようすけ)投げたんだ…。」お姉ちゃんが独り言のように呟いた。
「陽輔?…陽輔兄ちゃん今は野球してないみたいだね。」
お姉ちゃんは悲しそうに下を向いた。

1―(3)

「陽輔は、あたしの幼なじみだから中1。小学校の時は野球やってたの
それもいまの雄介ぐらい野球が大好きだった。」
悲しそうに下を向きながら話すお姉ちゃんの姿が不思議でたまらなかった。
「どうしてやめちゃったのぉ？！」
「それは…」

俺は脳を陽輔お兄ちゃんの過去へとタイムスリップさせた。

―――――――――――――――――

―――――――――

――――――

――…

チュンチュン。コケッコッコーーーージリリリリリリリイイイン
「はわぁ〜。」
俺は思いっきり目覚まし時計をとめた。
「今何時ぃ〜？！………し…7時だッッ！！！！」
俺は急いで階段をドタドタと駆け下りた。

「お母さん！！！起こしてって言ったのに！！今日練習なんだよ！！」
「あら？何回も起こしたのよ？全く…死んでるかと思ったわ。」
お母さんは皿洗いをしていた。
「っもう！パン持ってグランドで食べるから朝飯いらないから！」

俺は大慌てで家を飛び出した。

「はぁはぁ…」

いつもの練習グランドが見えてきた頃、もうチームは監督の集合がかかっていた。

ガランッさび付いた金網の扉を開けると全員がこちらに注目した。

「ぉい！お前遅いぞぉ！てかパン食いながらくんなよな。」

チームのキャプテンが笑顔で俺にそう言った。

「本当すみません！！わざとじゃないんです。寝坊したんです。」

「もうこんな事はないように。」

監督はベンチに座って腕を組みながら俺の目を見た。

俺は小さい声で、はい…とだけ言った。

「えぇ～っと。」

監督が俺等に何か言っているようだったけど全く集中出来なかった。

聞こえた事と言えば、今日はここで練習試合をすること、それはもうすぐ6年生の卒業大会があるからってことだけ。

しばらくすると他のチームのメンバーがゾロゾロとグランドに入ってきた。

あ…れ？彼奴(あいつ)何でここにいるんだ？

「お、おい。」

俺はそいつの肩をたたいた。

「んッ？！」

そいつはゆっくりと振り返った。

「あ…陽輔じゃん。」

1―（4）

「彼方（かなた）久しぶり。お前どうしてこのチームにいるの？」
彼方とは俺と同じ学年で俺と同じ野球チームに所属していた子。
「そのチームあんま好きじゃなかったし。全然うまくなれなかったし。」
彼方は嫌味ったらしく俺にそう言った。
「まぁ今日はよろしくね。」
彼方はそういって嫌らしく微笑んだ。
何なんだよ一体。

「あ？あれ彼方じゃね？」
キャプテンも彼方に気づいたらしい。
「はい、そうみたいですね。このチームやめたからてっきり野球もやってないと思っていたのに。」
「んー、意味わかんねぇな。」
キャプテンは俺の頭を叩きながら優しく笑った。

「せいれぇーーーーつ！！！」
審判の声とともに相手のチームと一人ずつ握手を交わした。
「ふんっ」その声に振り返るとその声の主は彼方だった。

「ちょっと集合しろ。」
「おい皆集合！！」
キャプテンの声に皆振り返り急いで走ってきた。
「相手のチームのバッテリーはすごいらしいから気をつけろ。ピッチャーは
ストレートの他にも投げてくる可能性はある。」

俺等のチームは比較的、ピッチャーに変化球は教えない。
小学校のうちに変化球を教えるとやっとのことで綺麗なフォームでストレートが
投げられるようになったのにバラバラな汚いフォームになってしまうから。

「プレイボール。」審判の声と共に試合がはじまるホイッスルが鳴った。
俺たちは後攻だった。ピッチャーはキャプテンだけど
今少し肩を怪我していて無理はさせられないから代理がいる。だけど代理が今日は
不運なことに熱で休みだった。

「陽輔。」
「ぁ、はい。」
「直樹(なおき)がもう無理そうだったら今日はお前に代わる。お前以外に投げられる
奴が今日はいないから。練習試合だから思いっきったプレイでいいからな。」
俺は5秒ほど口をぽかんと開けた。
「あっはい。分かりました…。」
「ただ…あっちには彼方がいる。彼方がバッターの時には気をつけろ。」
意味がよく分からなかった。俺にとって彼方って何なんだ?

試合は順調に進んでいき今はもう6裏だった。
カキーーーーン
「うわ!!いい当たり!!」
パスッ。俺の声と共に外野の人が思いっきりすべりこんでボールを取った。

「あぁ…。」

1―（5）

「直樹。次守備だけど、投げれそうか？」
「正直…辛いです。でも…。」
そう言いながらキャプテンは俺の方をチラッと見た。
「陽輔だったら大丈夫だ。多少の緊張はあるかもしれないが
コイツはいいピッチングをしてくれるはずだ。陽輔を信じろ。」
キャプテンは一瞬下を向いたがすぐに顔を上げて微笑んだ。
「そうですね。陽輔は球もすごくキレがあって速いしコントロールも良い。
2年生に任せるのは少し悪いんですけど。」
キャプテンがこっちを見たから俺は笑って答えた。
「大丈夫ですよ！プレッシャーには誰にも負けないくらい強いですから。」
そして俺はフィールドに向かった。

「ピッチャー交代だ。」審判が大声で叫んだ。その時、彼方からの視線を
感じたような気がした。
「ストライク、ファール！アウト！」
7回表は順調に進んでいきなんとかランナーは出したものの
0点で抑えることが出来た。
「ふぅ…。」
俺はベンチにどかっと腰を下ろし息を吐いた。
「陽輔良かったな。でもバッターもあるから。次。」
「え？あ、そうですね。頑張ります！」
キャプテンに褒められてすごくうれしかった。
カキーン…音の方へと顔を向けると翼先輩がヒットを打ったようだ

った。
「すごい、けど…これ何とかつながないと。」
緊張で汗がいっぱいのまま俺はバッターボックスに立った。

「ストライクー！！！」
この球はあまかった。だけど1球はみとかないとこの人がどんな球を投げて
くるのか分からないから…。次はあまい球だったら絶対打つ。
ピッチャーが足を高く挙げた。カキーーーンっ
「あ…やばい上がっちゃった。」
あ…れ？でも結構飛んだ。
「くっっ。」どうやらあのうまい外野の人も手が一つ分たらなかったようだ。
「やったぁーーー！！！」1アウト2・3塁。これはチャンスだ。
チャンスで7回裏は結局2点を取ることができた。これで2対1だ。
次も守るぞ。
気合をいれてフィールドに立つ。バッターボックスにいたそいつにとても
驚いた。彼方だった。監督は不安な表情でこちらを見ている。
大丈夫に決まってるだろ。何で彼方何かにビビる必要があるんだよ。

1―（6）

俺は自分を信じてキャッチャーミットに向かって思いっきりボールを投げた。
カーンッッ！！！「ファーール」
あ…れ？俺、彼方に打たれたことあったっけ？
「陽輔ってそんなに下手だったっけ？」彼方はそう言って俺にニヤりと
笑ってみせた。くそっっ！俺は無我夢中で投げまくった。

ファール。ファール。ファーール。何なんだよ。どうして打たれるんだ。
「これを打って見ろっっっっ！！！！！」
俺は今までで一番力強い球を投げた。ごっっ。鈍い音とともにバサッという
音が響いた。嫌な予感がして俺は顔を上げられなかった。
俺が下を向いていると互いのチームの人がバッターボックスへと駆け寄って
行くような足音が聞こえてきた。
おそるおそる顔を上げるとそこには意識を失った彼方の姿があった。
お腹に直撃してしまったようだった。
「おい彼方大丈夫か？！」「彼方？」「彼方？」皆が彼方の肩をゆすった。
膝がガクガクと震えてそのまま立てなくなって膝が地面についてしまった。

その様子に気がついた監督が俺の方へと駆け寄ってきた。
「おい、陽輔、しっかりしろ。彼方は大丈夫だ。ただ溝に思いっきり

はいってしまっただけだ。」
俺はほとんど無の状態だったからそんな監督の声が遠く感じた。

それからその野球は中止。俺等のチームにピッチャーがいなくなったからだ。
俺は、もうボールを投げる事が恐怖となり野球を続ける事が出来なくなってしまった。
でもどうしても野球を忘れたくなくてマネージャーをしていた。
それを止めようとするものは誰もいなかった。皆仕方のないことだと思ってくれて
いるようだった。だけど彼方だけは違った。また1年が立って彼方のチームと試合を
した時彼方が俺の姿を見てこう言った。
「お前もう投げれねーんだって？弱ぇーよなぁ。マネージャーするくらいなら
野球なんかやめちまえ。」彼方のその言葉に苛々してしまったが当
てしまった被害者
にそんな事は言えなかった。

その言葉を思い出すたび俺はこのまま野球に関わっていてもいいのか？と思うようになった。
そんな辛い思いが3ヶ月も続いて俺はついに野球と関わるのをやめた。
もう野球なんて出来ない。やっちゃいけないんだ。

―――――――――――
―――――――――
―――――――
―――――
―――…

「陽輔兄ちゃん野球好きなのに大好きなのにやめたんだ…。」
俺は何故だか深く傷ついた。
「あたしその試合見に行ってたんだよね。もうなんだか陽輔死にそうな顔してた。」
「俺、陽輔兄ちゃんがまた野球はじめるように自信取り戻してほしい。」
それを聞いたお姉ちゃんは涙を流しながらにっこりと笑った。

2―（1）　絆

俺は、いつものように学校が終わって一人で壁当てをしていた。
「陽輔兄ちゃん、きてくれんのかなぁ。」
ため息をつきながら俺は地面をみた。
その地面から聞こえてくる誰かの足音。じょじょにこっちに近づいてくる。

「よう。」
その声が俺に向けられているということはすぐに分かった。
「陽輔兄ちゃん！！！」
陽輔兄ちゃんの声だったからだ。
「おぅ！つぅか俺の名前教えたか？」
「ううん！でも姉ちゃんに聞いたから。」
俺が笑顔でそういうと陽輔兄ちゃんは不思議そうな顔をした。
「姉ちゃんって？？」
「優子姉ちゃん。俺の姉ちゃんで陽輔兄ちゃんの幼なじみ！」
「ぁ？優子の弟？？じゃぁ雄介だっけ？」
「うん、そうだよ！」
しばらくの沈黙。陽輔兄ちゃんはきっと、俺が陽輔兄ちゃんの過去を知ったことに気づいてる。

「んじゃ、キャッチボールしよう！」
沈黙を破ったのは俺。陽輔兄ちゃんのあんな寂しい顔見たくなかった。
パシュっシュパッやっぱり陽輔兄ちゃんの球はキレがあってすごく速い。
その時、後ろから近づいてくる影に俺は気づきもしなかった。

しばらくキャッチボールを続けているといきなり陽輔兄ちゃんの様子が
おかしくなった。
視線は俺のグローブじゃなくてそれよりもっと上。俺の頭よりももっと上だった。
おそるおそる後ろを振り返るとそこには制服を着たしらない
お兄ちゃんが立っていた。

「え・・誰・・？」俺のその声と同時に知らない兄ちゃんは
陽輔兄ちゃんに向かって
「よう久しぶりだな。野球やってんのか。」
うっすらと笑みをうかべながらソイツはそう言い放った。
「か…彼方か？」
彼方？もしかして陽輔兄ちゃんの球があたったっていう…
「そう・・あの彼方だよ。お前が死球をくらわせたあの彼方ね。
よく野球できるよな。こんな小さい子にお前の野球何か教わって何
になるんだよ。
また人の夢を奪う気か！！！」
彼方兄ちゃんはそういって陽輔兄ちゃんに怒鳴った。

「陽輔兄ちゃんは俺の夢を奪おうとなんかしてねー！！！ふざける
な。
何なんだよ。突然現れて恨みはらそうとでもしてるわけ？？あんた
こそ陽輔兄ちゃん
の夢奪ったじゃん！！あんたの事がストレスになってボール投げら
れなくなって
今でも大好きな野球やめなきゃいけなくなったのはあんたのせいじ
ゃん！！」

俺は拳をぎゅっと握って彼方兄ちゃんに向かってそう言った。

2―（2）

「ぁんだと??もう1回言ってみろ」
俺に近づいてくるその影。正直殴られるかと思った。
「だから!!!野球やめたのはお前のせいだ!!!」
俺は最後にもう1回彼方兄ちゃんにむかって怒鳴った。

彼方兄ちゃんは俺のグローブとボールをうばいその場にしゃがみこんだ。そして向こう側に立っている陽輔兄ちゃんに向かってボールを投げた。
ぽしっぽしっしばらく無言で2人はボールを投げ続けた。
「なぁ、陽輔…。」
「…何?」
「俺さ何でお前がいたチームを辞めたんだと思う?」
彼方兄ちゃんは静かにそう言った。
「わからない。」

「俺さ同学年で同じ年に野球チームに入ったのに俺よりもどんどんうまくなっていく陽輔に嫉妬してたんだ。俺誰よりも誰よりも努力してたつもりなのにどんどん陽輔に置いていかれて…それで陽輔がいる
あのチームを抜けて他のチームに入ったんだ。監督には陽輔がいる限り
このチームで野球はやらねーとか言って。」
「うん…。」
「それで久しぶりにあの時の試合でお前に会った時、俺、悔しくて

仕方なかった。
アップのときのお前の投げ方みて、すごいと思った。それで2年のくせして高学年差し置いて
試合でマウンド出てまじで悔しかった。んで俺ん所の監督があいても2年だからお前がいってこい。って言って試合に出して貰ったんだ。でもそんな理由で試合に出るなんて格好悪いじゃん？」

「いや、そんなことねーよ…」

「でも俺は格好悪いと思った。陽輔は自分のチームがピンチん時に出してもらえるのに
何で俺はそういうときには出して貰えないんだって。正直一人で勝手にキレてた。
だからお前との勝負の時、お前を挑発した。悔しくてしょうがなかったから。
本当は、あの球よけることは出来たんだ。でもどうせお前からヒット打てる何て思ってなかった
から格好悪いけどデットボールでランナー出そうとか思ったんだ。
そしたら運悪く溝入って…倒れた。でも俺、陽輔の事恨んだりしてなかった。」

「…。」

「それから家に帰ってゆっくり休んで考えたんだ。まだ2年だから
ポジションを変えるチャンスは
ある…だから中学生になったら陽輔と同じチームでバッテリー組みたいって。だから俺はその日から
キャッチャーになるためにがんばった。必死こいて。なのにしばらく立ってお前のチームに行って
お前に会ってガッガリした。マネジャー何かしてて…お前の野球に

対する気持ちはそんなんだったのかってまじでムカついた。うまけりゃ何してもいいって思ってるのかと思うとまじで殴りたくなった。」

「あぁ…。」

「けどしばらく立って噂で俺にデットボール当てたせいで投げられなくなって野球をやめた
って聞いてびっくりした。だから、ごめん、俺のせいだ、あれよけれたんだって…
言いに行く為にお前ん所まで走った。けどお前は不良と絡んで金髪にしてピアスだしもう遅い
駄目だ…と思った。謝っても、おせぇとか言われるんじゃないかってずっと思ってた。どうやったって野球はじめてくれないよなってずっと考えてた。だからお前のこと挑発するぐらいしか
出来なかったんだ。」

2―（3）

「なぁ…陽輔？」

彼方兄ちゃんは立ち上がりながら陽輔兄ちゃんのグローブ目掛けてボールを投げた。

「あ？」

「俺に向かって思いっきりボール投げろよ。」

彼方兄ちゃんはグローブを右手で叩いた。

陽輔兄ちゃんはボールをぎゅっと握り締めそれから彼方兄ちゃんのグローブ目掛けて投げた。

「ストライク！！！」

彼方兄ちゃんは空目掛けて叫んだ。

「俺と一緒にもう一回野球しようぜ！！！」

彼方兄ちゃんのその大きい声に陽輔兄ちゃんの小さい声が混じった。

「あぁ…しよう。」

すると陽輔兄ちゃんは俺に向かって歩いてきた。

「雄介。お前のおかげで彼方の気持ち知ることができた。」

それを見た彼方も俺の方に来て

「雄介。お前のおかげで俺の気持ち言うことができた。」

と言って俺の頭を軽くたたいた。

俺は2人に飛びっきりの笑顔で

「うん！！！俺もこれから野球一生懸命頑張るからね！！！」

とだけ言った。

3－（1）　プレイボール

翌日昨日あった出来事を姉ちゃんに話した。
「ぇ？彼方と陽輔が？」
姉ちゃんはしばらく驚きを隠せない様子をみせたが
しばらくすると笑顔で喜んでくれた。

「それで…陽輔兄ちゃんと彼方兄ちゃん…今日来る…。」
俺がおそるおそる姉ちゃんに問いかけると意外にも姉ちゃんは
簡単にＯＫをくれた。

うぃーーーん。姉ちゃんの部屋と俺の部屋を交代しながら掃除機で
かけたり散らかった物を片付けたりした。
陽輔と彼方が久々にうちに来るからといって姉ちゃんは
張り切っていた。
お昼をすぎ太陽が真上をとりこしたときピンポーンと部屋中を鳴り
響く
インターホン。俺がすばやく玄関の扉を開いた。
「よぉ！！」
陽輔兄ちゃんはケーキの箱を俺の前でぶら下げている。彼方兄ちゃ
んは
ただ笑っているだけ。
「これ冷蔵庫にいれといてくんね？金ねぇから一緒に食べるまでの
ケーキ用意できなかったから雄介と優子とお母さんとお父さんで食
べて。」
陽輔兄ちゃんは笑っていた。

しばらく玄関で話していると二階からドタドタと足音が聞こえてき

た。
「あー陽輔！彼方！あんたも来てるならきてるって言ってよね。」
姉ちゃんは俺の頭を思いっきり叩いた。
「いってぇー。」
「んま、あがって！！！」
姉ちゃんは陽輔兄ちゃんと彼方兄ちゃんにそう言った。
でも2人は苦笑い。
部屋に入って4人はしばらく黙ってポテチを食べ続けた。するといきなり
彼方兄ちゃんはニヤニヤし始めた。
「え？？おい？彼方？」
陽輔兄ちゃんがそういうと彼方兄ちゃんは吹き出した。
「なんなんだこのしらけさ。糞うけんだけど。」
そういうと彼方兄ちゃんは一人で笑い始めた。姉ちゃんは彼方兄ちゃんを
見ながら唖然としている。
「か…彼方っておとなしい子じゃなかったっけ。」
「ぁん？それは小さいときの話。俺も変わったんだよ。」
そういうとゲラゲラ笑い始めた。

「あっそ…てか今日陽輔と彼方は何で家に来たの？」
姉ちゃんの問いかけにすばやく反応したのは陽輔兄ちゃん。
「ぁ…あぁ、俺等野球チーム入ることになってさ、、雄介も一緒の所にいれたくて
その相談。」
するとポテチを頬張りながら彼方兄ちゃんがしゃべりだした。
「そそ…条件は小中一緒でいい監督でまぁまぁ強いチーム。んでもって俺等3人は仲良しになるっていう条件。」
「「「あ？？？」」」
俺と陽輔兄ちゃんと姉ちゃんが声をそろえてそういうと彼方兄ちゃ

んはまだ笑い始めた。
「だってそうだろ？雄介は才能あるし俺等2人の仲裁？っつうの？
やってくれたし。
3人は親友ってわけだ。コイツはまだガキだけどな。」
彼方兄ちゃんは俺のあたまを3回叩いた。

3ー（2）

「いったいなぁー。何回叩かれればいいんだよ。彼方兄…。」
俺が言い終える前に彼方兄ちゃんは俺の口をふさいだ。
「彼方。俺の名前は彼方だ。そんな長ったらしい名前じゃねー。」
正直意味がわからなかったからポカンとしていると陽輔兄ちゃんが口を開いた。
「んあ？そうだな。俺は彼方の事彼方って呼んでるからお前も彼方って呼べ。
そして彼方は俺の事陽輔って言ってるからお前も陽輔って呼べ。」

それでも意味がわからなくて今度はお姉ちゃんが俺を助けてくれた。
「呼び捨てしろってことよ。」
そういうとポテチをひとつだけつまんだ。
「でもお兄ちゃんじゃん？俺にとって。」
「「でも俺にとってお前は弟じゃなくて親友だ。」
陽輔兄ちゃんと彼方兄ちゃんが声をそろえて言うから４人は小さい部屋で
大声で笑った。
「分かったよ。陽輔。彼方。」
俺は初めて親友とよべる人ができた。しかも年上。何だか楽しそうだ。

「んでさ、話戻っけどチームどうする？？」
「俺さ結構いろいろ考えたんだよね。ホワイトソニックかレッドスピン長嶺っていうチーム
の２つ。」
陽輔はチラシを俺等に見せた。
「え？待って俺レッドスピン長嶺知ってる。弱かったんだけど監督

が代わって
結構やれるぐらい強くなったんだって。」
俺はレッドスピンの方のチラシを指差してそう言った。

「俺も知ってる。んだっけ、宮内監督かなんかだったと思うけど
長嶺小と長嶺中の人を数名集めてチームのメンバーを全く変えたら
しいな。
初心者も数名あつめて何故か初心者とうまい人ばっかとキャッチボ
ールさせて
初心者はうまくなるだろうけど元々うまい人はどうなんだって話だ
けど。」
彼方はそういって苦笑いした。

「今日もやってるらしいからちょっと見に行くか。」
その時玄関の扉は開いたような音がしてしばらくすると部屋のドア
は開いた。
「あら、陽輔、彼方。久しぶりじゃない。どうしたの？」
お母さんが帰って来た。
「あ、お母さん俺等いきたい場所あんだけどレッドスピンのグラン
ドに
つれてってくれない？」
俺はお母さんの前でチラシをひらひらさせながら一生懸命訴えた。
「もしかして雄介ここに入りたいの？」
「ぅん！！！」
「分かったけど入る限り絶対ヤめちゃだけだからね。」
お母さんはそういって不気味な笑みをみせた。
「さ、車出すから皆おいで。」
ブロロロロロロロロロッ車が動きだした。
しばらく乗っているとグランドのライトが見えた。
「ここで、降りて、ちょっと車とめてくるから。」

お母さんの声とともに車のドアが次々に開いた。
「んじゃっ、行くか！！！」
陽輔の声で皆が進みだした。レッドスピンのグランドへ。

3－（3）

ピーーーーー！！！
カーンッッ！パシュッッ
どうやらノックをしているようだった。
「何だ？あのボール打ってる奴…下手くそじゃね？あんなん取れるに決まってんじゃねーか。何の練習になんだよ。」
彼方がブツブツそういっていると一人の男が俺たち４人の方へ歩いてきた。

「何だ？お前たち野球やりたいのか？」
その男のその声で全員が俺たちの方を見た。
「やりたいっつーか…まぁ今ん所見学だけです。」
陽輔が冷静にその男にそ言った。

「そうか。俺はココの監督をしている宮内弘樹（みやうちひろき）だ。お前等経験者だろ？」
「え？監督…？ぁ、経験者っす。」
彼方が少し満足そうな笑みをみせて監督にそう言った。
すると監督はふっと鼻を鳴らした。

「経験者が増えたところでチームが強くなるとは限らん。」
そう言ってベンチの方へ歩いていった。

守備をしている一人が俺等の事をすまなそうに見て頭を下げた。
「なんだよ。意味わかんねー。」
彼方はグランドの土を蹴り飛ばした。
「あぁ・・監督の狙いが全くわからん。ただ経験者だけじゃチーム

力は
たかまらないって言いたいんだろ。」
「だからってあんな経験者を追い出すような事言わなくていいのに…。」
俺はうつむきながらそういった。

「おーい！！！初心者と経験者ペアになってボールランだ。」
その監督の声で全員が動きだしペアになってキャッチボールをしながら前へと
走り出した。初心者はボールをこぼしたりして後ろがつまったりといろいろ事故がおきていた。

「あんなんじゃ経験者にストレスが溜まるだけじゃねーか。」
彼方はそう言ってグランドの中央へと走り出した。
「おいお前キャプテンだろ！！このやり方でいいと思ってんのか？初心者は上達するかも
しんねーけどお前等のような経験者がちっとも上達しねーだろ！いいのかよこれで！！！」
彼方はキャプテンに向かって大声を上げた。
キャプテンは下を向いて黙ったまま。
「おい…！！」
彼方のその声とともに彼方の服を誰かがつまみあげた。
「何すん…！！」
そう言いながら後ろを振り返るとそこにいるのは監督だった。
「俺のやり方が気に入らねーんだったら他をあたれ。」
彼方はそう言われ俺たちの元へと歩いてきた。

グランドを抜け駐車場へと向かう時俺は彼方の名前を呼んだ。
「ねぇ…彼方？」
「おい？」俺と陽輔が問いかけると彼方は小さな声で

「あんなやり方ぜってー俺が代えてやる。」
「え？じゃぁ…」
俺が言う終わる前に彼方が口を挟んだ。
「あぁあのチームで野球をしてやる。」

「「うん！！！」」
俺と陽輔が元気よくうなずいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1840z/

君と見た夢

2011年12月28日12時53分発行